

当院における外傷経験者の実態調査

○林亮子

はやし小児歯科（福岡県）

【目的】日常の臨床で、小児の外傷症例の対応を模索する内、乳歯の外傷に起因すると思われる後継永久歯の萌出異常症例に遭遇した。そこで今回の目的は、これまでの外傷症例を再検討することで、今後の対応の指針とすることにある。

【対象】平成5年11月の開業から平成15年末までに来院した患児4602人（男子2266人、女子2336人）の中で外傷経験者476人（男子253人、女子223人）について、カルテ、問診表、定期検診表等を調査した。

【結果】1）当院における外傷経験者の割合は、全体で10.3%（男子11.2%、女子9.5%）であった。その内の7.8%に再受傷が認められた。2）受傷時年齢は、乳歯では男女共に3～4歳が最も多く、永久歯では男児8歳、女児7歳が最も多かった。3）受傷部位では、乳歯、永久歯共に上顎の中切歯が最も多く、次いで下顎の中切歯であった。4）受傷様式は、乳歯では歯の動揺が最も多く、次いで歯の破折、変色であった。永久歯では逆に歯の破折が最も多く、次いで歯の動揺であった。5）受傷原因としては、乳歯、永久歯共に、転倒、衝突が多かった。6）受傷場所は、乳歯では家庭内、次いで幼稚園等で、永久歯では学校等が最も多かった。7）受傷月は、乳歯では10月、永久歯では4月が最も多かった。8）処置内容として、乳歯では経過観察が最も多く、次いで固定、歯髄処置、修復処置、抜歯の順となっていた。永久歯でも経過観察が多かったが、次いで固定、修復処置であった。9）乳歯の後継永久歯への影響として、形成不全、萌出遅延（困難）、永久歯胚の埋伏が認められた。10）永久歯の予後として、歯髄処置への移行やX線的に歯根吸収や根尖病変がみられた。11）性格等患児自身に起因する点では明確な傾向はなかった。

【考察】外傷症例では、乳歯・永久歯共通適切な処置の重要性と合わせて定期的な経過観察が不可欠と考えられる。

学童期における骨粗鬆症の予防に関する意識調査

○小島幸美、 牧憲司、 木村光孝
（九歯大・小児歯）

【目的】

近年、若年者の生活習慣について多くの問題が指摘されている。骨粗鬆症も生活習慣病の一つと考えられ、生活習慣が形成される小児期からの予防教育が重要であるとされる。

ヒトのライフサイクルの中で、最も骨の成熟が活発な時期は乳児期から思春期である。この時期に可及的に骨塩量を増やし、いわゆる最大骨量を増加させることが、将来の骨粗鬆症の予防につながるといわれている。したがって、学童期における骨粗鬆症に関する認識度と生活習慣の実態を把握することは、小児期における骨粗鬆症の予防に重要であると考えられる。そこで今回は北九州市の小学校に通学する小学生を対象に、質問表による調査を実施した。

【対象および方法】

調査時期：平成16年2月

調査地域：福岡県北九州市

調査対象：小学4年・5年・6年生の男女

調査方法：自記式の調査を実施した。調査項目は現在の生活習慣および骨粗鬆症に関する本人の認識を問うものとした。

【結果】

小学4年生、5年生では骨粗鬆症に関する認識が、6年生に比べて低い傾向にあった。しかし生活習慣に関する項目では、特に睡眠時間と運動習慣に関して、小学4年生、5年生では個人差が少なかったが、6年生では個人差が大きく、生活習慣の乱れが明らかに認められた。さらに6年生では一週間の運動回数は女兒に比べて男児で多く、また「体重を減らしたい」という意識は男児に比べて女兒で有意に多かった。

【考察】

骨粗鬆症の予防や生活習慣に対する適切な指導時期に関しては、小学4年生、5年生の時期が望ましいと思われた。